

令和 2 年 6 月 3 日現在

機関番号：33919

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K13477

研究課題名（和文）中間構文の共時的・通時的研究

研究課題名（英文）A synchronic and diachronic study of middle constructions

研究代表者

久米 祐介 (Kume, Yusuke)

名城大学・法学部・准教授

研究者番号：40645173

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,500,000円

研究成果の概要（和文）：現代英語における中間構文の特異性、すなわち主語の特性・属性の叙述的解釈、潜在的動作主の含意、法助動詞、否定辞、難易を表す様態副詞のいずれかとの義務的共起は、能格構文からの構造変化によって叙述的機能範疇Rの導入と恣意的動作主PROの降格に起因すると結論付けた。具体的には、vPが表すイベントがRの仲介によって形容詞、あるいは可能性を表す抽象的形容詞と叙述構造を成し、副詞の解釈がより動作主指向になることにより恣意的PROがvPに付加するようになった。この変化により現代英語における中間構文の特異性が生じるようになったと説明した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

中間構文は多くの先行研究により様々な分析がなされ、その特異性について説明されてきたが、いまだに十分説得力のある結論に至っていない。本研究では現代英語だけでなく、古英語、中英語、近代英語において中間構文とその関連構文を通時的に観察・分析することによって、これまでの共時的な分析にはない新しい視点から中間構文の特異性を統語・意味の両面で理論的かつ実証的にとらえることができた。

研究成果の概要（英文）：It is suggested that peculiar properties of middle constructions in Present-day English, i.e. predicative meaning of the subject, implication of implicit agent and obligatory co-occurrence of a modal auxiliary, a negative element or a manner adverb denoting difficulty come from structural changes of ergative constructions, i.e. the introduction of a predicative functional category R and the demotion of arbitrary PRO. More precisely, as a result of the introduction of R, an event denoted by vP is described by an adjective denoting difficulty or null adjective of possibility, and the arbitrary PRO is adjoined to vP because of the increase of agent orientation of adverbs in the construction.

研究分野：英語学

キーワード：中間構文 能格構文 叙述構造

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

中間構文の共時的研究は盛んで、その特異性により長年にわたって多くの言語学者の興味を引いてきた。その特異性の一つには、主語と述語の関係は形態統語的には能動態であるが、意味関係は受動的であることが挙げられる。具体的には *The vase breaks easily.* では、述語の *breaks easily* は受動形態素を伴っていないにもかかわらず、主語の *the vase* との意味関係は明らかに受動的であり、*The vase can be broken easily.* とほぼ同様に解釈される。このことは、*The vase broke yesterday.* のような能格構文にもみられるが、両者には (1) ~ (4) の違いが指摘されている。

- (1) 能格構文は出来事を表すのに対して、中間構文は主語の性質や属性を叙述する。
- (2) 能格構文の動詞は使役動詞に限られるが、中間構文には使役動詞以外に行為動詞も現れる。
- (3) 能格構文では動作主が含意されないが、中間構文には先行詞を持たない恣意的な動作主が含意される。
- (4) 能格構文には法助動詞、副詞、否定辞の共起が任意であるのに対して、中間構文ではそのいずれかとの共起が義務的である。

この中間構文に見られる特異性については、様々な分析がなされている。語彙意味論では、Roberts (1987) は Anderson (1979) で提案された被動性条件を用いて、中間構文の主語は動詞の表す行為によって影響を受けなければならないと主張した。これによって、**The fact knows easily.* のような状態動詞を含む中間構文の非適格性を説明したが、*The book reads easily.* のような行為動詞を含む中間構文は非動性条件を満たさないにもかかわらず適格であるため、十分な説明とは言えない。Fagan (1992) は Vendler (1967) のアスペクトによる動詞の分類を用いて、中間構文に現れる動詞は行為動詞と達成動詞であり、状態動詞と到達動詞は現れないと主張した。しかし、*break* のような典型的な到達動詞が中間構文に現れるという点でこの分析も十分なものではない。統語論では、Keyser and Roeper (1984) や Storik (1992) などは、中間構文の主語は能格構文と同様に動詞の補部位置からの移動により生じると主張している。しかし、提案された中間構文の派生からどのように (1) ~ (4) の特徴、特に統語論に密接に関連のある (4) の制約が生じるのかは十分に議論されていない。このように、語彙意味論においても統語論においても、(1) ~ (4) の中間構文の特異性を全て同時に説明できる原理的な分析は提案されていない。

2. 研究の目的

中間構文の歴史的発達の過程をとらえ、現代英語に観察される意味的・統語的特異性に原理的な説明を与える。

3. 研究の方法

歴史コーパス *The York-Toronto-Helsinki Parsed Corpus of Old English Prose (YCOE)*, *The Penn-Helsinki Parsed Corpus of Middle English, Second Edition (PPCME2)*, *The Penn-Helsinki Parsed Corpus of Early Modern English (PPCEME)*, *Penn Parsed Corpus of Modern British English (PPCMBE)*, 辞書 *Middle English Dictionary*, *The Oxford English Dictionary of the English Language*, 歴史的英語研究書 Visser, F. T. (1963) *An Historical Syntax of the English Language* から中間構文と関連構文である能格構文を検索、抜粋し分析を行う。能格構文と中間構文の出現時期を特定し、能格構文から中間構文が派生したことを証明する。

4. 研究成果

古英語には能格構文は確認できたが、中間構文は発見できなかった。これは Visser (1963) の見解と一致する。一方で、Visser (1963) と OED の記述とは異なり、中英語には能格構文と中間構文の特徴を併せ持つプロトタイプが発見できた。具体的には、法助動詞と副詞を含む事例である。法助動詞が未来を表し、副詞が時を表すと解釈されれば、イベントを表す能格構文であるが、法助動詞が可能性を表し、副詞が様態を表せば中間構文と解釈される。本研究では、このような曖昧性により再分析が生じ_{[TP The vase_i [T_i [RP [vP [vP break t_i] PRO] [R'-ly [Adj_p easy]]]]]}の構造が出現したと仮定した。すなわち、叙述を表す機能主要部 Relator (R) の導入と副詞の動作主指向性の増加による恣意的 PRO の出現である。Den Dikken (2006) によれば、すべての叙述関係は_{[RP XP [R' RELATOR [YP]]]}の構造を持つ。叙述の機能主要部 R により、vP の表すイベントが難易を表す形容詞によって叙述され、vP から V の補部から名詞が主節の TP 指定部へ移動することによって主語の特性・属性の叙述的解釈が生じる。さらに、RP 補部に生じる難易形容詞は R 主要部の -ly 接辞と併合することで副詞として具現する。一方で、RP 主要部に難易形容詞が現れない場合は、可

能性を表す抽象的形容詞が生起し、この抽象的形容詞は T 主要部の法助動詞、あるいは否定文に生じる支持的 do との主要部移動による併合によって認可される。また、恣意的 PRO が vP に付加することで潜在的動作主の含意が生じる。この恣意的 PRO の出現により、近代英語に能格構文には生じない非使役動詞が中間構文に生じるようになった。この構造的再分析により現代英語の中間構文にみられる (1) ~ (4) の意味的・統語的特異性が説明される。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 久米祐介
2. 発表標題 英語史における中間構文の発達について
3. 学会等名 日本英文学会東北支部大会シンポジウム
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 久米祐介	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ひつじ書房	5. 総ページ数 -
3. 書名 語法と理論との接続を目指して 英語の通時的・共時的の広がりから考える17の論考（執筆箇所：能格動詞 breakの史的発達：中間構文に至るまで）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----